

研究・調査報告書

報告書番号	担当
359	高崎健康福祉大学薬学部細胞生理化学研究室
題名 (原題/訳)	
Pattern of alcohol consumption and its effect on gastrointestinal symptoms in inflammatory bowel disease. アルコール消費の様式と炎症性腸疾患の胃腸症状に与えるその効果	
執筆者	
Swanson GR, Sedghi S, Farhadi A, Keshavarzian A.	
掲載誌 (番号又は発行年月日)	
Alcohol. 44(3): 223-228 (2010)	
キーワード	
アルコール、炎症性腸疾患、クローン病、潰瘍性大腸炎	
要旨	
<p>アルコールはその酸化促進効果や腸のバリアーに対して有害な作用をもたらすことから、アルコール摂取は炎症性腸疾患（クローン病と潰瘍性大腸炎）を再燃させる強力な誘発要因となるものと考えられる。しかし、アルコール摂取と炎症性腸疾患再燃との正確な関連性については不明である。本研究は、アルコール摂取の様式と炎症性大腸炎患者の胃腸症状に与えるその効果について検討した。被験者は 129 人の患者で、クローン病患者が 52 人、潰瘍性大腸炎患者が 38 人、過敏性腸症候群患者が 39 人であった。全ての被験者について、疾患の活動性（クローン病活動性指数、潰瘍性大腸炎活動性指数）と NIAAA の判定基準によるアルコール消費量を質問票で確認し、さらに、アルコールによる胃腸症状の発現やその重症度への影響についても質問票で確認した。</p> <p>非活動状態の炎症性腸疾患患者でのアルコール消費状態（軽度、中等度、重度）は一般的な米国人口での割合と同様であった。特に、90 人の非活動性炎症性腸疾患患者のうち 56 人（62%）は現在も飲酒しており、この値は米国人口での 61%に匹敵していた。現在も飲酒しているヒトのうち、炎症性腸疾患患者の 75%（42 人）と過敏性腸症候群患者の 43%（9 人）でアルコール摂取によって胃腸症状が悪化したと報告した。しかし、アルコールの消費量の違いは、全ての胃腸症状の重症度には影響しなかった。非活動性の炎症性腸疾患患者のアルコール摂取量は一般人口の場合と同等であった。過敏性腸症候群患者よりも非活動性の炎症性腸疾患患者の方が、飲酒による胃腸症状の悪化に関する報告が多かった。炎症性腸疾患では非活動性の場合でも、アルコール摂取はその胃腸症状を悪化させる。</p>	